

ニッポン

ドクター和の



臨終凶巻

憧れの人でした。氏名の前に「男」とつけるのがこれほど似合う人はもう現れないでしょう。男・星野仙一が、流星が燃え尽きるごとく真冬の空に消えました。

星野さんの魅力の原点をいくつか探してみました。父親が不在だったこと。地元愛が強すぎたこと。そして大の負けず嫌い。そんな星野さんはごく近い人にして、がんであること、を明かさなまま70歳で逝きました。

膵臓(すいぞう)がんと診断されたのは2016年の夏。急性膵炎がきっかけで、がんが発覚しました。膵臓は胃の後ろ側にあるタラコのような形をした

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東大第二内科。1995年、大阪府豊中市で「人を診る」総合診療を目指す。著「痛くない死に方」は、関西国際大学客員教授。

臓器。血糖を下げるインスリンを分泌することもに食べ物の消化に必要な酵素を分泌するといふ2つの大切な役割を担いながらも目立たない、しかし重要な臓器です。

膵臓がんは、ほとんど無症状なため早期発見が困難なからです。星野さんのように腹痛を伴う急性膵炎をきっかけにして発見されたときは、かなり進行した状態であることが多いので



す。アルコール、喫煙、糖尿病、脂肪摂取過多などが大きなリスクです。ハイリスクの人は早期発見のため定期的に腹部エコーと腫瘍マーカーを測ることが大切。以前この連載で取り上げた大相撲の九重親方(元横綱千代の富士)やジャーナリストの竹田圭吾さんも膵臓がんでした。星野さんは発覚時に余命3カ月と告げられ、手術はできなかつたようです。膵臓がんへの抗がん剤は効果がある薬が開発され、余命数カ月といわれながらも年単位で元気に活躍されている人を散見します。もはや膵臓がんは「絶望とはいえない時代になりつつあります。

星野さんも余命3カ月に宣告されながら、一年半近く活躍されました。死の1カ月前の昨年12月1日にはかなり痩せられていたようですが、大阪で行われた野球殿堂入りを祝う会に顔を見せています。

2日の夜にトイレで転倒し、あごを腰を強打。しかし翌3日も食事をとり、家族が尿瓶を用意しても「要らん」と笑いながら断ったそうです。しかし、その翌朝に容体が急変。娘さんの腕に抱かれながら、やすらかに旅立ちました。男の人生を闘い抜いた先に「平穏死」されたのです。尿瓶だけでなく、医療麻薬のモルヒネも最期まで拒否していたそうです。がんの痛みを抑えなく、いまや緩和ケアに必須です。我慢せず使ってほしかったとも思いますが、これもまた男・星野らしいエピソードですよね。

好きな言葉は「夢」でした。「いつも夢にチャレンジしているから、オレはすぐく若いのだ」とよく話していたとか。若く熱かった勇姿に、負けず嫌いの男のロマンをたくさん見させていただきました。

38 星野仙一

闘い抜いた男の平穏死